

BlackBerryリプレースに際し、 AGC旭硝子が選んだモバイル基盤はMobileIron

機動的なビジネスを支えるモバイル端末を、BlackBerryから最新のスマートフォンへと大きく舵を切ったAGC旭硝子。その導入にあたっては、BlackBerry同等のセキュリティが欠かせないことからさまざまなモバイルプラットフォームを調査。最終的に同社が選んだのは、高い機能と優れたユーザビリティ、管理性を備えたMobileIronだった。



グローバルITリーダー
情報システムセンター長
神庭 基氏



情報システムセンター統括主幹
OA・ネットワークグループリーダー
赤崎 峰大 氏



情報システムセンター
グローバルIT企画グループ主席
谷口 達郎氏



情報システムセンター
グローバルIT企画グループ
寺内 量則 氏

BlackBerryから最新のスマートデバイスへ移行

AGC旭硝子は、営業力やネットワーク活動の強化をめざし、部門や地域の壁を越えて円滑なコミュニケーションが行える環境整備を着実に進めてきた。文書共有基盤やWeb会議システム、携帯電話、BlackBerryの導入、さらにこれらを安全に利用するためのセキュリティ強化などである。特にBlackBerryは、日本企業としては最初期に大量導入するなど、先進的にコミュニケーション強化に取り組んできた。しかし、そのBlackBerryが、新たなスマートフォンの台頭に伴い衰退。導入済みのBlackBerry Enterprise Serverが、接続しているExchange Serverの最新バージョンに対応しないことや、BlackBerryが日本市場から撤退するといった動きもあり、更新を断念。最新のスマートフォンにシフトすることにした。

旭硝子株式会社 グローバルITリーダー 情報システムセンター長 神庭基氏は、「今回のスマートデバイスの導入は、コミュニケーションの強化によりコラボレーションを進め、イノベーションを引き起こすためのIT武装の最終段階と位置付けています」と語る。

NTTドコモとMobileIronが組みトータルなサービスを提供

AGC旭硝子は、新たなスマートデバイス導入に向けて2012年10月頃から検討を開始。BlackBerry同様のセキュリティレベルを維持するため、MDM (Mobile Device Management) の検討を始めた。旭硝子株式会社 情報システムセンター 統括主幹 OA・ネットワークグループリーダー 赤崎峰大氏は、「当初キャリア系のMDMから検討を始めましたが、セキュリティレベルが足りませんでした。その後いくつか候補に上りましたが、どれも一長一短で、最終的にMobileIronに決めるまで、10種類近くの製品を比較検討しました」と語っている。

MobileIronは、単なる端末管理だけの第一世代MDMとは一線を画す「EMM (Enterprise Mobile Management) プラットフォーム」。MDMに加えて、MAM (Mobile Application Management)、MCM (Mobile Content Management) の各機能を提供し、企業がモバイルデバイスを安全に効率的に活用するための包括的なプラットフォームを実現する。

同社がMobileIronを選定した理由として挙げるのは、BlackBerryと同等のセキュリティが実現できること、グローバルで活用できること、日本での実績があること、幅広いOS、端末に対応していること、同社で文書共有基盤として利用しているSharePointと連携がとれることなどである。また、ヨーロッパの一部でBYOD (Bring Your Own Device) を利用するプラットフォームとして、MobileIronを利用していたという実績があったことも要因のひとつだ。さらに旭硝子株式会社 情報システムセンター グローバルIT企画グループ 主席 谷口達郎氏は、「我々としては、BlackBerryがそうであったように、セキュリティ、端末、サービスをワンパッケージで導入したいと考えていました。そのためは、当社のパートナーであるNTTドコモと組んでサービスを提供してくれることが重要でした。その意味でMobileIronには、非常に協力的に動いていただいております、それも決め手になりました」と語っている。

日本とアジア地域で2000台規模の導入を目指す

今回のプロジェクトは、日本とアジアの営業担当者やエンジニアなど、営業力やイノベーション向上に貢献できる人材を中心に2000台規模で導入予定。端末は、グローバルでの調達が可能でソニー製のスマートフォン「Xperia Z1」を採用。タブレットも必要に応じて導入する予定だ。さらに、セキュリティを担保するため、MobileIronのAppConnectによりコンテナ化されたスマートデバイス向けスペース分割アプリ「Divide」を採用した。

実際の構築、展開、運用に関しては、BlackBerryやXperia Z1のノウハウを持つNTTドコモとMobileIron

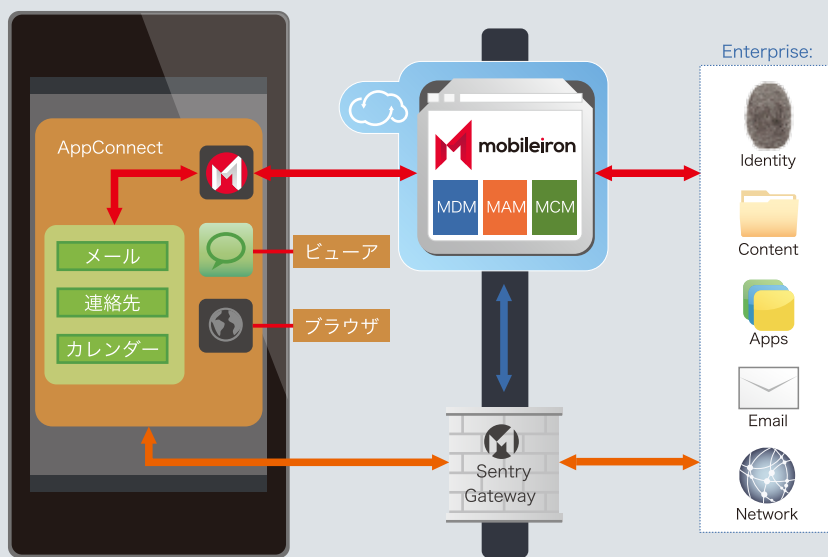
がタグを組み、AGC旭硝子を支援。4月から6月にかけて実施予定の展開に向けて、今開発の真っ最中だ。同時に、プレゼンテーションなどにも利用する予定のタブレット用に、個人が持つコンテンツを共有したり、既存のコンテンツをスマートデバイス用に変換するなど、効率的なコンテンツ共有のための環境整備も行っていく。

旭硝子株式会社 情報システムセンター グローバルIT企画グループ 寺内量則氏は、「まだプロジェクトは始まったばかりですが、現在のBlackBerryは、画面が小さい、バッテリーが持たないなどの不満があり、それが解消されることへの期待が社内で非常に高まっているのは感じて

います。プレッシャーは大きいですが、プロジェクト完遂に向けてがんばります」と抱負を語る。

同社は、まずは2000台規模の展開を進める予定。その後、必要に応じてBYODも含めて検討しながら、さらなる活用を目指す。最後に神庭氏は、「AGC情報システムセンターでは“AGCスタイル”を掲げ、変化を恐れず、何事にもチャレンジを続けています。その手段としてのモバイル活用は、ワークスタイルを変革する上で大きな意味があると思っています」と今回のプロジェクトへの期待を語った。

MobileIron+DivideによるセキュアなPIMソリューション



Divideは、スマートフォンの領域を分割するセキュアPIM(個人情報管理)アプリ。iOS・Androidに対応している。一台のデバイスを会社用と個人用に切り分けて利用でき、BlackBerryと同等のセキュリティを実現する。そのDivideをMobileIronのアプリをコンテナ化する機能「AppConnect」と組み合わせることによって、さらに安全性を高めた。これにより、企業はスマートフォンを安心して社員に利用させることができ、社員もDivideの外側の領域では、ある程度自由な使い方しても企業領域に影響を及ぼすことはない。AGC旭硝子は、MobileIron+Divide+NTTドコモ(Xperia Z1)の組み合わせにより、今回のソリューションを実現した。

AGC AGC株式会社

■会社概要

社 名:AGC株式会社
創 立:1907(明治40)年9月
設 立:1950(昭和25)年6月
従業員数: 6,269人(2013年12月31日現在)